The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アート&テクノロジー知術研究プロジェクト「知デリ」創成期から2010年度まで
Author(s)	木ノ下, 智恵子
Citation	Communication-Design. 2012, 6, p. 75-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9281
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アート＆テクノロジー知術研究プロジェクト「知デリ」創成期から2010年度まで

木ノ下智恵子（大阪大学CSD「知デリ」ワーキングメンバー／小林傳司、久保田徹、春日匠、学生スタッフの代表執筆）

The unity of knowledge:consilience of art and technoscience project progress report of 5 years

Chieko Kinoshita（Center for the Study of Communication-Design,Osaka University）

アート＆テクノロジー知術研究プロジェクト「知デリ」は、大学と社会が連携して、異なる専門領域の登壇者をゲストに向かえ、表現や技術についての対話の場をつくり出す試みである。このプログラムでは異なる専門領域における「知術」（知識と技術）を横断・交換し、新しい発想の創出やアイデアの実現につなげることを目指している。また、2007年度からは学生による企画・運営もおこなわれ、異領域のコミュニケーションデザインに関わる人材育成の場としても機能している。本稿では、本プロジェクトが始動した2006年から2010年度までを概説するとともに、領域横断による対話の場の可能性を検証する。

キーワード
芸術、科学技術、領域横断
Art, Science and technology, Technical knowledge, Domain crossing

■「知デリ」の種子～科学技術とアートのモヤモヤ？！～

アート＆テクノロジー知術研究プロジェクト（通称知デリ）は、コミュニケーションデザイン・センター（以下、略称CSCD）が設立した翌年の2006年から始動している。

近年、大学の使命は教育・研究・社会貢献の三つであると言われるようになったが、CSCDにおける、それらの三つは、大学院の共通教育としてコミュニケーション教育・コミュニケーションデザイン研究・社学連携プロジェクトである。社学連携とは、行政・NPO・文化施設や市民といった社会そのもののシンクタンクとしての役割を大学が担うという、新たなミッションである。大学の社会貢献の一つとして産学連携は根付いてきたが、大学の公共的役割は産業界の為だけにあらず。CSCDは大阪大学の中でも最初期から社学連携に取組み、幅広い市民サポートを実践するためのプロジェクトやアウトリーチ活動を行い、大学と社会の新たな関係を模索しながら絶えず活動を続けている。また、CSCDが掲げるコミュニケーションデザインの仮定義は、専門知識をもつ者と持たない者の間、利害や立場の異なる人々の間をつなぐ、コミュニケーションの回路を構想・設計・実践としているが、CSCDスタッフは、科学技術、医療看護やケア、臨床哲学、アートやデザインなど、部門や専門も多岐にわたり、部局内コミュニケーションデザインが設立当初の課題であった。

このCSCDスタッフにおけるコミュニケーションデザインの途上に、「知デリ」の種子は芽生えたのである。

CSCDのオープニングプログラムとして、専門領域の異なる2名のスタッフが対話する「カフェバトル」を実施した際、「アートの仮説と科学の提案」というテーマのもと、互いの実情について語り合う中で、“即効性の無い科学技術の肩身の狭さへの疑問”と“社会の役に立つアートの隆盛に対する違和感”というテーマが浮上した。科学技術とアートという、社会的位置づけや人々の認識においても、一見、無関係に思える両方の分野における“共通点のモヤモヤ”があったのだ。そこで、“すぐには役に立たないけれど、何か大事な営みがあるはず、という仮説”をコンセプトに何かを始めようということになった。

■「知デリ」のスタイル～現場合わせの異種格闘技？！～

いくら大学の教育研究機関の発案とは言え、藪から棒に「科学技術とアートのモヤモヤについて考えましょう！」と言っても、いささか説得力にかける。そこで、アート（藝術）とテクノロジー（科学技術）の共通するキーワードとして「知術」という言葉を用いることにした。ここでの「知術」とは、所謂、辞書的意味として用いられる「謀や計略」ではなく、モヤモヤについて考え、何らかの表現にする「智恵と技術」を意味している。また、通称として掲げている「知デリ」とは知術デリバリーの略である。総合大学そのものが知術の集合体であり、そこに携わる我々の社会貢献として、新たなミッションである社学連携に取組む際にも、このキーワードは明瞭と考えたからである。ただし、ここでのデリバリーとは、大学が社会に知術を届ける、という一方的なベクトルではなく、一つの場を共有するゲスト同士、そして参加者が、様々な研究内容や表現活動について知り、個々の思考や感性が触発され、対話が生まれることを目的とした、双方向のベクトルをイメージしている。

こうして、“コミュニケーションデザイン”という未知なる主題の実践的研究のために、アート（藝術）とテクノロジー（科学技術）を内包するキーワードとして「知術」という言葉を冠し、その定義や有用性について考察する「知術研究プロジェクト」が始動した。

具体的には、ワーキングメンバーが、あるテーマを設定し、ゲストを選出する。ゲスト選定のポイントとしては、一見、対局にある科学者とアーティスト、文系研究者と理系研究者が、それぞれの専門から少しだけ距離が亜量なテーマについて、あるいは相手方の異なる専門領域をも取入れて議論する度量やセンスが感じられることである。ゲストの専門領域や思想が遠すぎても近すぎてもいけないという、ゲストの組合せの妙も大切にしている。そうした、こちら（企画側）の身勝手な期待を込めながらも、ゲスト同士による事前の顔合わせなどは一切無く、プログラム当日に始めて出会い、約二時間程度のタイムテーブルの中で、各々の専門分野における「智恵」や「技術」を披露し、横断・交換を試みながら対話を進めていく。そして、参加者からの質疑や意見や感想も交えて、緩やかな双方向型の対話が実践

「アート、デザイン、テクノロジーの横断～教育と研究の現場から～」
（2007年3月16日、アップルストア心斎橋2F シアター）
ゲスト：八谷和彦（メディアアーティスト）、原山優子（東北大学工学研究科教授）

されていく。マニュアルや台本などは一切存在せず、ゲストの相性と化学反応を期待した、極めて即興性の高い異種格闘技的なプログラムとして設計されている。

また、場所性が担保するデザインセンスや参加者層を意図的に活用すべく、主にアップスルトア（大阪＝心斎橋、東京＝銀座）の協力を得て、プログラムを開催している事も重要だ。知術には高度な知性と優れた感性が共存しているはずであり、智恵や技術に触れ、得ることは、感性的にも優れている、つまるところ「カッコイイ！」と認識されなければならない。それは「知デリ」のブランディングの要素としてアップスストアというセンスとブランド力を活用していることに加え、本プログラムの傍聴を目的としていない、Mac Computer や iPod 目的でストアを訪れた人々が、ふらりと専門的知識や創造的感性に触れる場を提供しているという点で、大学とストア双方にに利点のある形での相乗効果が期待できる。

「知デリ」では、「質の高い知術の対話を創造の場で行う」という、独自のコミュニケーションデザイン（構想設計）を念頭に、テーマや人や場所をキュレーションしている。なんとなくのモヤモヤをカタチにするには、主旨（種子）となるテーマやキーワードと共に、出来事の仕掛け方や表現のクオリティーマネジメントが肝要なのである。

■「知デリ」の進化と深化～学生の学びの為の第二の現場！？～

モヤモヤから生まれ、手探りで始めた「知デリ」は、数名のCSCDメンバーによって、緩やかなペースで進めており、年に二回程度のプログラムを実施していた。事前の企画会議は当然だが、プログラム後には、必ず学内にて諸々を検証する反省会なども行っている。確か［K.S>1］、三回目の実施後の反省会に有志の学生が参加することになり、その場で交わされた教員と学生＝プログラム実施主体者と参加者層の質疑から話は発展していき、学生から

「ロボットとケダモノとニンゲン～ホントに区別が分からない～」
（2008年2月22日（金）、アップルストア銀座　3Fシアター）
ゲスト：飴屋 法水（演出家・美術家）、石黒 浩（知能ロボット学者／大阪大学）

「自分たちも企画を行いたい」という要望があった。

学生たちには実施のための条件として、確固たるシステムやマニュアルなどは一切無しで学生自らが全てを担うこと。「知デリ」のブランディングと社会的責任を担う覚悟があること。これらに伴う自由と不自由さを自らが、やり繰りできることを挙げた。

教員「知デリ」と同様に、学年や専門領域も異なる数名の学生有志が、企画調査や研究室訪問、テーマの検討決定、ゲストとの調整、広報計画と実践、当日のマネジメントやファシリテーションなどの一連のプロセスを実体験する。プログラムの開催場所は、アップルストアのみならず、学内でも行われるようになったのは、学生主体の発想によるものだ。

ちなみに、CSCDの授業では、アクティブラーニングの手法をとることが多い。そこで重視されているのは、手順を上手くこなすことや汎用性の高いプレゼン手法を学んだりすることではなく、そうした手続き化したカリキュラムだけでは学びきれない、ゲストとの交渉や現場でのアクシデントといった生の経験から直接に学ぶことを重視するという手法である。このため、講師陣が一方的に何かを教えたり、予め用意された答えに向かうのではなく、分野間の壁が厚く、ある意味蛸壺化したとも言える総合大学の実情に小さな風穴を開けるかのように、異なる専門領域の学生たちが集い、自らの対話を通じて学ぶ場を目指している。知デリの運営に参加する学生たちもこれを、心（頭脳）と体の基礎体力を鍛錬するスパルタ放任主義型セルフラーニングとして理解しているようであり、また以下に挙げたインタビューのからも読み取れるように、そういった場を積極的に求めてもいる。知デリのような実践を大学の教育プログラムとして導入することは、授業とは異なる、第二の学びの場を提供しているといえよう。

「フェロモン！？～科学的分析と文学的考察～」
（2008年1月27日（日）、アップルストア心斎橋2Fシアター）
ゲスト：倉橋隆（大阪大学大学院教授）、ヨコタ村上 孝之（大阪大学大学院准教授）

【CSCDホームページ掲載／学部1回生時より「知デリ」学生スタッフとして関わる、鈴木 寛和（文学部人文学科2回生）へのインタビューより】

CSCD：実際にスタッフとして関わった感想は？

鈴木：まさか自分が、美術史に収まらない現代アートの方をゲストに迎え、イベントを企画するなんて想像もつきませんでした。でも、知デリに参加したことで、美術史の中の作品のみならず、現代作品や、演劇、映画、パフォーマンスなどにまで興味の幅が広がり、とても有益だったと思います。その一方で、僕は昔から人に自分の意見を伝えるというのが苦手で、自分の考えを他のスタッフに説明するのに苦労したりもしました。

CSCD：それは企画の段階で？　具体的にどういう場面で苦労したかおききしてもいいですか？

鈴木：知デリでは毎回、領域の異なる2組のゲストをお招きしています。今回（2011年1月26日開催「カラ・コン」）は、「道具について考えたい」ということで、まず最初に、ヒューマンインタフェースの専門家である黒川隆夫さんをお招きすることが決まりました。でも、もう一組のゲストがなかなか決まらなくて・・・。事前の打ち合わせで黒川さんが「機械のインタフェースの開発に、人間のノンバーバル（非言語的）・コミュニケーションがヒントになるのではないか」と考えていることを知って、contact Gonzoのみなさんならぴったりだと思ったんですが、他の人は他の人で、それぞれ「この人が今回のゲストにぴったりだ」と思う案を出してくるわけです。特に、contact Gonzoのみなさんのパフォーマンスは既存のジャンルにおさまらなず、言葉で表現するのが難しいので、それを見たことがない他のスタッフにどう説明するか、本当に悩みました。

CSCD：でも、最終的にはcontact Gonzoのみなさんをゲストにすることに決まったん

「カラ・コン～インターフェースとしての身体～」
（2011年1月26日（水）1、大阪大学 豊中キャンパス ステューデントコモンズ）
ゲスト：contact Gonzo（無目的的集合体）、黒川 隆夫（大阪大学特任教授／非常勤講師）

ですね。

鈴木：はい。なかなかうまく表現できずつたない言葉でしたが、他のみんなも一生懸命理解しようとしてくれました。この経験は、今後の自分にとって大きな自信になると思います。今回の企画に関わったことで、今は積極的に自分の考えを発信していくことにおもしろさを感じ始めています。 今回「知デリ」に学生スタッフとして参加して、僕は大学生活を楽しむ「手がかり」を得られたように思います。これからも現場で生まれる新しい発見・気づきを、参加者・ゲスト・運営スタッフ、その場に居合わせる全員で楽しるイベントを届けていきたいです。

■「知デリ」の効能～知的な歓びの積み重ね！？～

CSCD設立翌年の2006年度から始動し、2007年度からは有志の学生も参加して、2010年度までに実施した「知デリ」は11回となった。（実施概要参照）この「知デリ」という対話の場のデザインを通じて発せられた言葉の数々は、必ず、記録している。その一つ一つの内容を本稿でご紹介することはできないが、CSCD（知デリ）の創成期から2009年度までの第一シーズンの軌跡として、実施プログラムの中から5本を抜粋し再編収録した「知デリBOOK」を発行している。（CSCDのHPからPDFデータをダウンロード可能なので、ぜひ、機会があればご一読いただきたい。）これは、プロジェクトの実施報告書という役割を果たしながらも、異分野の専門家による知的対談のカルチュラルスタディーズ本としても、十分に堪能いただける内容になっている。［K.S>2］5つの対話集では、人類学者、劇作家、哲学者、メディアアーティスト、脳科学者、サウンド・アーティスト、知能ロボット学者、美術家といった、分野や専門性、利害や立場が異なる、その道のスペシャリストが、自身の専門

性の提唱は程々に、互いの領域に関心を示し、寄り添い、時には相反する意見を交わしながら、第三の視点をイメージさせる対話の可能性が広がりが凝縮されている。

また、報告書ではその役割はあまり見えてこないが、「知デリ」のファシリテーターは、参加者の予想不可能な感想や質問からゲストを守るガードマンではなく、今この場で交わされている対話の流れを読み、最小限の介入で内容の深度を深めていく調整役としての機能が求められている。特に「知デリ」において、それが顕著であるのは、科学者や研究者側の人間とアートやデザインの実践者側の人間が本プロジェクトのワーキングメンバーであることに起因していると考える。つまり、双方の分野への強い関心を抱き、双方の視点から人選を考察し、人脈を持ち寄るが、各々の分野のゲストへの適切なフォローではない、ある種の保身的な振る舞いに対しては互いに見逃さないことを心がけている。これによって常に各々の専門性との距離感を保ちながら、対話の場や時間と対峙する事が可能となるだろう。そうした前提を含めて、ゲストのみならず、参加者、そしてファシリテーターの三者による対話の場の共有が、「知デリ」の充実をもたらす。

これら諸要素によって、全国各地で行われている科学者やアーティストによる啓蒙的アウトリーチ活動や、大学の一方的な意図に基づいた広報活動のあり方に対して、知デリの実践が問題提起を投げかけていると言えよう。

この「知デリ」の自己検証に関する更なる考察については、本プロジェクトのリーダーである小林傳司氏が、「知デリ BOOK」に寄せた、あとがき（抜粋）をご参照いただきたい。

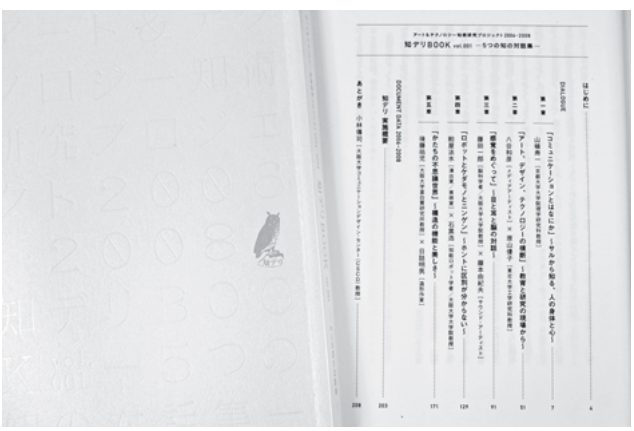
「日本では今や、年間1000件に上るサイエンスカフェが開催されているという。われわれは知デリをサイエンスカフェとは呼んでいないが、広い意味ではその一種かもしれない。

アーティストと科学者を必ず組み合わせて議論してもらうという知デリの手法は、ふだん出会わない聴衆が集まるという結果を生んでいる。科学に関心がある人と現代アートに関心のある人が同じ会場で議論に参加するという機会はあまりないからである。イギリスやフランスで始まったサイエンスカフェは、本来、一部の専門家に閉じた科学をパブリックな存在として取り返すことに狙いがあり、わかりやすい解説を旨とする「科学のショーウィンドウ」ではないのである。われわれの発想にもこのような視点があったことは言うまでもない。「役に立たない」けれどパブリックな存在として、アートと科学を理解しようという発想である。私の考えでは、知デリは本来の意味での「エンターテインメント」である。アートや科学がわれわれに与えるのは、知的な歓びであり、世界の見方の豊饒化ではないだろうか。こんな風に世界を見ている人がいるのだ、ということに気付くこと自体の面白さは、おそらく「成果指標」だの「数値目標」だの

といった「大事な」そして「役に立つ」世界とは無縁かもしれない。」（小林傳司、2010年3月発行「知デリBOOK」あとがきより抜粋）

さて、2010年から、CSCDそして、「知デリ」の第二シーズンも始まった。

“すぐには役に立たないけれど、何か大事な営みがあるはず、という仮説”を掲げた「知デリ」の効能に即効性は無く、その効き目を実証／実感するには、長期的で継続可能な基盤整備と社会への、他者への働きかけが必要だ。こうした視点や手法や価値観は、「知デリ」に関わらず、様々な問題に直面する、今の我々に共通するのではないのだろうか？経済産業的な価値基準で発達した現代の社会において、既存の価値感を見直し、我が事として語る術を身につけるべく、、、。一方向のパブリックインフォメーションではなく、双方の信頼と許容によって成立するパブリックリレーションズを目的に、愚直だが洗練された“知的な歓び”を、「知デリ」を、今後も積重ねていきたいと考える。



「知デリBOOK」目次と表紙デザイン

■ 2006－2010年度「知デリ」メンバー

・CSCDワーキング

小林傳司 木ノ下智恵子 久保田テツ 春日匠 仲谷美江

・学生有志スタッフ（2007年度から2010年度）

吉良拓馬 竹内亮介 中垣麗子 開地祐子 坂根遼 鋤納有実子 中津嘉隆 橋本亮 松本ひとみ 米田千佐子 石井恵理 石田峰洋 岡直哉 川西遥 鈴木竜太 西尾真由子 野口結衣 森下和彦 落合智弘 鈴木寛和

■ 2007－2010年度「知デリ」実施概要

2007-2010年度「知デリ」実施概要
（タイトル※印は報告書内要記載、所属肩書き等は開催時のもの）

タイトル／テーマ	ゲスト（所属／肩書／専門）	日時	場所	企画主体／ファシリテーター
コミュニケーションとは何か※ ～サルから知る、人の身体と心～	山極寿一（京都大学大学院理学研究科教授）	2007年3月10日（土） 14:30-16:30	アップルストア銀座 3Fシアター	CSCD教員知デリワーキング 平田オリザ、本間直樹（CSCD）
アート、デザイン、テクノロジーの横断※ ～教育と研究の現場から～	八谷和彦（メディアアーティスト） 原山優子（東北大学工学研究科教授）	2007年3月16日（金） 19:00-20:30	アップルストア心斎橋 2Fシアター	CSCD教員知デリワーキング 小林傳司（CSCD）
感覚をめぐって※ ～目と耳と脳の対話～	藤田一郎（脳科学者／大阪大学大学院教授） 藤本由紀夫（サウンド・アーティスト）	2007年9月22日（土） 16:00-17:30	アップルストア心斎橋 2Fシアター	CSCD教員知デリワーキング 小林傳司（CSCD）
フェロモン！？ ～科学的分析と文学的考察～	倉橋 隆（大阪大学大学院教授） ヨコタ村上 孝之（大阪大学大学院准教授）	2008年1月27日（日） 16:00-18:00	アップルストア心斎橋 2Fシアター	学生スタッフ
ロボットとケダモノとニンゲン※ ～ホントに区別が分からない～	飴屋 法水（演出家・美術家） 石黒 浩（知能ロボット学者／大阪大学大学院教授）	2008年2月22日（金） 18:00-20:00	アップルストア銀座 3Fシアター	CSCD教員知デリワーキング 平田オリザ（CSCD）
気づきのデザイン ～見えない「町」の魅力が見えてくる～	小松 正史（京都精華大学准教授） 松村 真宏（大阪大学大学院准教授）	2008年11月7日（金） 18:00-19:45	大阪大学21世紀懐徳堂 多目的スタジオ	学生スタッフ
かたちの不思議世界※ ～構造の機能と美しさ～	日詰 明男（造形作家） 後藤 祐児（大阪大学蛋白質研究所教授）	2009年3月1日（日） 16:00-18:00	アップルストア心斎橋 2Fシアター	学生スタッフ
大人が夢中になる科学 ～学びと遊びの共鳴～	西脇 秀樹（大人の科学マガジン編集長） 菊池 誠（大阪大学サイバーメディアセンター教授）	2009年3月22日（日） 14:30-16:30	アップルストア銀座 3Fシアター	CSCD教員知デリワーキング
ないものにふれる ～触覚からみえる世界～	伊庭 靖子（美術家） 安藤 英由樹（大阪大学大学院情報科学研究科准教授）	2010年1月30日（土） 16:00-18:00	アップルストア心斎橋 2Fシアター	学生スタッフ
科学の美　芸術の方程式	鹿野 護（アートディレクター） 荻原 哲（ピアニスト／分子細胞生物学者／大阪大学大学院理学研究科教授）	2010年3月14日（日） 18:00-20:00	アップルストア銀座 3Fシアター	CSCD教員知デリワーキング
カラ・コン ～インターフェースとしての身体～	contact Gonzo（無目的的集合体） 黒川 隆夫（大阪大学特任教授／非常勤講師）	2011年1月26日（水） 18:00-20:00	大阪大学ステューデントコモンズ	学生スタッフ